

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 特許公報 (B2)

(11)特許番号

特許第3318941号
(P3318941)

(45)発行日 平成14年8月26日(2002.8.26)

(24)登録日 平成14年6月21日(2002.6.21)

(51)Int.Cl.⁷
H 0 1 M 4/58
// H 0 1 M 4/02

識別記号

F I
H 0 1 M 4/58
4/02

C

請求項の数1(全5頁)

(21)出願番号 特願平3-359091
(22)出願日 平成3年12月28日(1991.12.28)
(65)公開番号 特開平5-182667
(43)公開日 平成5年7月23日(1993.7.23)
審査請求日 平成10年12月9日(1998.12.9)

(73)特許権者 000002185
ソニー株式会社
東京都品川区北品川6丁目7番35号
(72)発明者 山本 佳克
福島県郡山市日和田町高倉字下杉下1-
1 株式会社ソニー・エナジー・テック
郡山工場内
(74)代理人 100067736
弁理士 小池 晃 (外2名)
審査官 青木 千歌子

(58)調査した分野(Int.Cl.⁷, DB名)
H01M 4/02 - 4/58

(54)【発明の名称】 正極材料の製造方法

(57)【特許請求の範囲】

【請求項1】一般式 $L_{1-x}MO_2$ (ただし、Mは1種以上の遷移金属を表し、 $0.05 \leq x \leq 1.10$ である)で表されるリチウム複合酸化物を主体とし、炭酸リチウムを含有してなる正極材料を合成するに際し、少なくとも合成の一部を CO_2 濃度が0.1容量%以上、100容量%未満の雰囲気中で行うことを特徴とする正極材料の製造方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】本発明は電流遮断装置を備えた非水電解液二次電池において使用される正極材料の製造方法に関する。

【0002】

【従来の技術】近年、電子技術の進歩により、電子機器

の高性能化、小型化、ポータブル化が進み、これら電子機器に使用される高エネルギー密度の二次電池の要求が強まっている。従来、これらの電子機器に使用される二次電池としては、ニッケル・カドミウム電池や鉛電池等が挙げられるが、これら電池では放電電位が低くエネルギー密度の高い電池を得るという点では未だ不十分である。

【0003】最近、リチウムやリチウム合金さらには炭素材料のようなリチウムイオンをドープかつ脱ドープ可能な物質を負極として使用し、また、正極にリチウムコバルト複合酸化物等のリチウム複合酸化物を使用する非水電解液二次電池の研究・開発が盛んに行われている。この電池は、電池電圧が高く、高エネルギー密度を有し、自己放電も少なく、サイクル特性に優れている電池である。

【0004】ところが、上述のような非水電解液二次電池は、何らかの原因で充電時に所定以上の電気量の電流が流れ過充電状態になると、電池電圧が高くなり、電解液等が分解してガスが発生し、電池内圧や電池温度が上昇する。さらに、この過充電状態が続くと電解質や活性物質の急速な分解といった異常反応が起こり、温度上昇を伴う発熱や比較的急速な破損といった損傷状態を呈する場合がある。

【0005】かかる問題についての対策として、本発明者らは電池内圧の上昇に応じて作動する電流遮断装置を備え、正極材料として電池内圧上昇剤となる炭酸リチウム (Li_2CO_3) で表面が被われたリチウム複合酸化物 (Li_xMO_2) を用いた電池を提案した。この電池では、たとえば過充電状態が進むと正極中の炭酸リチウムが電気化学的に分解されて炭酸ガスが発生し、このガス発生により電池内圧が上昇して電流遮断装置が作動し、充電電流が遮断される。したがって、過充電における電池内部の異常反応の進行が停止し、電池の急速な温度上昇を伴う発熱や比較的急速な破損の防止が可能となる。

【0006】上記電池において、正極材料として使用される炭酸リチウムで被われたリチウム複合酸化物を合成する方法としては、たとえばコバルト、ニッケル等の遷移金属の炭酸塩と炭酸リチウムを Li/M (モル比) が X よりも大きくなるように量りとて焼成し、リチウム複合酸化物を生成するとともに炭酸リチウムを残存させる方法、予めリチウム複合酸化物を合成しておく、このリチウム複合酸化物に炭酸リチウムを添加して再溶融させる方法がある。

【0007】

【発明が解決しようとする課題】ところが、上記方法により、正極材料を合成した場合、正極材料中に残存する炭酸リチウム量が理論値量よりも遙に下まわり、残存する炭酸リチウム量をコントロールすることができない。このため、正極材料に所望の電池内圧上昇効果を持たせるのが困難である。

【0008】そこで、本発明はこのような従来の実情に鑑みて提案されたものであり、正極材料中に多量の炭酸リチウムを残存させることができ、残存炭酸リチウム量をコントロールすることが可能な正極材料の製造方法を提供することを目的とする。

【0009】

【課題を解決するための手段】上述の目的を達成するために、本発明者らが鋭意検討を重ねた結果、正極材料中に残存する炭酸リチウム量は、合成雰囲気に CO_2 を存在させることにより増大し、コントロール可能となることを見い出すに至った。

【0010】本発明の正極材料の製造方法はこのような知見に基づいて完成されたものであり、一般式 $\text{Li}_x\text{M}\text{O}_2$ (ただし、Mは1種以上の遷移金属を表し、 $0 < x < 1$ である) で表されるリチウム複合酸化物を主体とし、炭酸リチウムを含有してなる正極材料を合成するに際し、少なくとも合成の一部を CO_2 濃度が 0.1 容量%以上、100 容量%未満の雰囲気中で行うこととするものである。

【0011】本発明の製造方法において製造される正極材料は、正極活性物質となるリチウム複合酸化物を主体とし、電池内圧上昇剤となる炭酸リチウムを含有してなるものである。上記リチウム複合酸化物としては、 Li_xMO_2 (ただし、Mは1種以上の遷移金属を表し、 $0.05 \leq x \leq 1.10$ である) で示されるリチウム複合酸化物、たとえば LiCoO_2 , LiNiO_2 , $\text{Li}_{1-x}\text{Ni}_y\text{Co}_{(1-y)}\text{O}_2$ (ただし、 $0.05 \leq x \leq 1.10$, $0 < y < 1$) 等が挙げられる。

【0012】このようなリチウム複合酸化物と炭酸リチウムよりなる正極材料は、たとえばコバルト、ニッケル等の遷移金属 (M) の炭酸塩と炭酸リチウム (Li_2CO_3) を、 Li/M (モル比) が X より大きくなるように量り取って混合し、 $600^\circ\text{C} \sim 1000^\circ\text{C}$ の温度範囲で焼成してリチウム複合酸化物を生成するとともに炭酸リチウムを残存させる方法、あるいはリチウム複合酸化物を予め合成しておく、このリチウム複合酸化物中に炭酸リチウムを添加して再溶融する方法等により合成することができる。また、上述の方法において遷移金属の炭酸塩の代わりに水酸化物、酸化物を使用しても同様に合成可能である。

【0013】ここで、本発明では、正極材料中に多量の炭酸リチウムを残存させ、残存炭酸リチウム量のコントロールを可能なものとするために、少なくとも正極材料の合成の一部を CO_2 ガス濃度が 0.1 容量%以上、100 容量%未満の雰囲気中で行うこととする。

【0014】すなわち、正極材料中に残存する炭酸リチウム量は、合成雰囲気中に CO_2 ガスを存在させることにより増大し、さらに合成雰囲気中の CO_2 ガス濃度を上昇させていくことにより、残存炭酸リチウム量が一定となり、正確なコントロール可能となる。なお、合成雰囲気中の CO_2 ガス濃度を 100 容量%とすると、リチウム複合酸化物の分解が起こり、正極材料としての機能が劣化する。したがって、本発明においては、残存炭酸リチウム量の増大を図るとともに正極材料の機能を維持するために、合成雰囲気中の CO_2 ガス濃度は 0.1 容量%以上、100 容量%未満とする。

【0015】

【作用】リチウム複合酸化物を主体とし、炭酸リチウムを含有してなる正極材料を合成するに際して、合成を CO_2 ガス濃度を調整していない空気中で行った場合、正極材料中に残存する炭酸リチウム量が理論値よりも遙に低くなり、残存する炭酸リチウム量をコントロールすることができない。

【0016】これに対して、上記正極材料の合成の少な

くとも一部を、 CO_2 ガス濃度が所定濃度範囲とされた
雰囲気中で行うと、正極材料中の残存炭酸リチウム量が
増大し、さらに合成雰囲気中の CO_2 ガス濃度を上昇さ
せていくと、残存炭酸リチウム量が一定となり、正確な
コントロール可能となる。これは以下の理由によるもの
と考えられる。

【0017】すなわち、正極材料の合成を CO_2 ガス濃度
を調整していない空気中で行う場合には、焼成、再溶
融等の高温処理に際して、化1に示すように炭酸リチウ
ムの分解反応（化1においては、右向きの反応）が進行
する。

【0018】

【化1】



【0019】一方、合成を CO_2 ガス濃度が所定濃度範
囲の雰囲気中で行う場合には、高温処理に際する炭酸リ
チウムの分解反応が抑えられる。また、炭酸リチウムが
分解しても、分解生成物である酸化リチウムと合成雰囲
気中に存在させた CO_2 ガスが反応して炭酸リチウムが
合成される。したがって、正極材料中の残存炭酸リチウ
ム量の増大が達成されることとなる。

【0020】

【実施例】本発明の好適な実施例について実験結果に基
づいて説明する。

【0021】実施例1

炭酸リチウムと炭酸コバルトを Li/Co (モル比) =
1. 15となるように量り取って混合した後、 CO_2 濃度
0. 2容量%の酸素存在雰囲気中で900°C、24時
間焼成して正極材料（サンプル試料1）を合成した。

【0022】実施例2～実施例11

焼成雰囲気中の CO_2 濃度を表1に示すように変えた以
外は実施例1と同様にして正極材料（サンプル試料2～
サンプル試料11）を合成した。

【0023】実施例12

炭酸リチウムと炭酸コバルトを Li/Co (モル比) =
1. 15となるように量り取って混合した後、空気中で
900°C、12時間焼成した後、さらに CO_2 濃度5.
0容量%の雰囲気中で900°C、12時間焼成すること
により正極材料（サンプル試料12）を合成した。

【0024】比較例1

炭酸リチウムと炭酸コバルトを Li/Co (モル比) =
1. 15となるように量り取って混合した後、空気中で
900°C、24時間焼成して正極材料（比較試料1）を
合成した。

【0025】比較例2

焼成雰囲気中の CO_2 濃度を100容量%としたこと以
外は実施例1と同様にして正極材料（比較試料2）を合
成した。

【0026】このようして合成された各正極材料につい
て、X線回折を行ったところ、比較試料2を除いて、 LiCoO_2 の合成が確認でき、いずれの正極材料におい
ても Li_2CO_3 の回折ピークが存在していた。

【0027】次に、各正極材料中に残存する炭酸リチウ
ム量を調査した。その結果を表1及び図1に示す。な
お、正極材料中の炭酸リチウム量は、試料を硫酸によっ
て分解し、生成した CO_2 を塩化バリウムと水酸化ナト
リウムを含有する溶液中に導入して吸収させ、この溶液
を塩酸標準溶液で滴定することによって CO_2 濃度を定
量し、この定量値から換算した。

【0028】

【表1】

	合成雰囲気中の CO ₂ 濃度 (容量%)	正極材料中の残存 炭酸リチウム濃度 (重量%)
サンプル試料 1	0.2	2.72
サンプル試料 2	0.5	5.31
サンプル試料 3	1.0	5.34
サンプル試料 4	5.0	5.32
サンプル試料 5	10.0	5.36
サンプル試料 6	20.0	5.33
サンプル試料 7	50.0	5.40
サンプル試料 8	90.0	5.36
サンプル試料 9	95.0	5.32
サンプル試料 10	99.0	5.36
サンプル試料 11 サンプル試料 12	99.9 空気中で12時間焼成 した後、CO ₂ 濃度5. 0容量%雰囲気中で1 2時間焼成	5.35 5.34
比較試料 1	0	1.60
比較試料 2	100.0	13.41

【0029】図1および表1から、正極材料中に残存する炭酸リチウム量は、合成雰囲気中にCO₂ガスを含有させることにより増大し、CO₂濃度を0.5容量%以上にすることにより、一定となることがわかる。このことから、正極材料中にCO₂ガスを含有させることは、残存炭酸リチウム量を増大させる上で有効であり、特に、合成雰囲気中のCO₂濃度を0.5容量%以上とすれば、残存炭酸リチウム量が一定となり残存炭酸リチウム量の正確なコントロールが可能となることがわかつた。

【0030】しかし、比較試料2のX線回折結果からわかるように、合成雰囲気中のCO₂濃度を100容量%とすると、正極活性物質であるLiCoO₂の分解が起こる。したがって、正極材料の機能を維持するためには、合成雰囲気中のCO₂ガス濃度は100%未満とすることが必要であることがわかつた。

【0031】なお、本実施例では、出発原料として炭酸リチウムと炭酸コバルトを用いたが、炭酸コバルトの代わりに酸化物、水酸化物等を出発物質としても同様の効果が得られることが確認された。また、合成する正極活

物質としてもLiCoO₂以外のリチウム複合酸化物(たとえば、Li_xNi_yCo_(1-y)O₂(ただし、0.05≤x≤1.10, 0<y≤1)を採用した場合でも本発明は同様な効果を発揮した。

【0032】

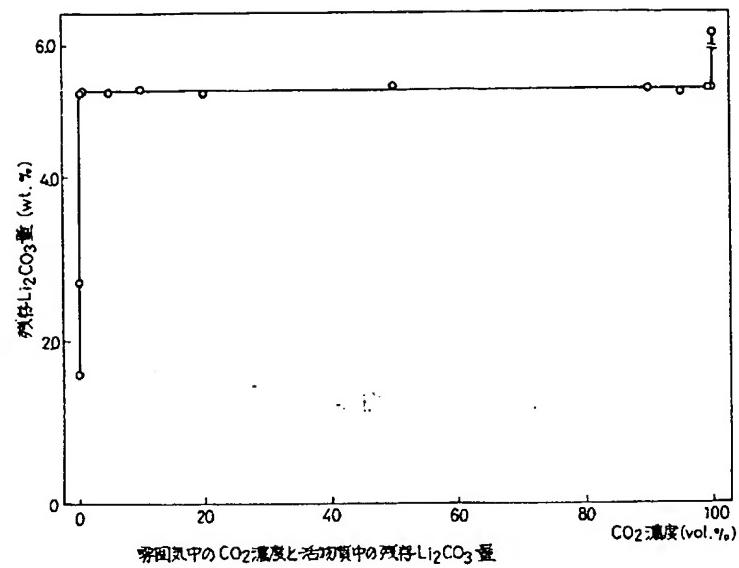
【発明の効果】以上の説明からも明らかなように、本発明の正極材料の製造方法は、リチウム複合酸化物を主体とし、炭酸リチウムを含有してなる正極材料を合成するに際して、合成の少なくとも一部をCO₂濃度が0.1容量%以上、100容量%未満の雰囲気中で行うので、正極材料中に残存する炭酸リチウム量を増大させることが可能である。

【0033】したがって、本発明によれば、正極材料に所望の電池内圧上昇効果を持たせることができとなり、上記正極材料を使用する防爆密閉構造の非水電解液二次電池の安全性をより向上させることができる。

【図面の簡単な説明】

【図1】合成雰囲気中のCO₂濃度と正極材料中に残存する炭酸リチウム量の関係を示す特性図である。

【図1】



THIS PAGE BLANK (USPS)

[Claim 1]

A method of preparing a positive electrode material mainly containing a lithium composite oxide represented by the general formula Li_xMO_2 (where M is one or more transition metals, and $0.05 \leq x \leq 1.10$) and further containing lithium carbonates, wherein

at least a part of the processes for synthesizing said positive electrode material is carried out in an atmosphere where the density of CO_2 is at least 0.1 % by volume and less than 100 % by volume.

THIS PAGE BLANK (USPTO)